

研究ノート：『論理哲学論考』において「対象」と意義の確定性は関係するか？

入江俊夫（文教大学非常勤講師）

『論理哲学論考』（以下、『論考』）の難解な見解に「対象」についての説がある。対象は、論理学的分析の終点で露わになる要素命題において出現する名によって指示される単純者（2.02）であり、何が事実として成立しているかということとは独立に存立し（besteht）（2.024）、「世界の実体」（2.02）を成す。また、「対象はすべての状況の可能性を含んでいる」（2.014）。

以上のような「対象」についての見解は、『論考』を読む者を長い間魅了してきた一方で、いかにも「形而上学的」（ウィトゲンシュタイン的な意味でも）であり、後年の『哲学探究』（以下、『探究』）で著者自身によって批判されもした。その自己批判がどの程度の得たものであるかという問題を措くとしても、一点、留意されねばならないことがある。しばしば「結晶のような」と称される『論考』の統一性は、ラッセルのパラドックス、論理的・数学的必然性の源泉、実在論と観念論、独我論という問題、倫理的なものの占める場所など各方面から提起されてくる諸問題を、命題の本質についての問いとの関係で一挙に解決するという点に存しているといえる。だが、『論考』という統一性へと至る道は一本道ではなく、紆余曲折に満ちており、「前期ウィトゲンシュタイン」は決して一枚岩ではない。特に「対象」については、成立した『論考』を中心に考えないほうが実りのある解釈へとつながるのかもしれない²⁵。しかしながら、本稿では、このように多くの側面をもつ「前期ウィトゲンシュタイン」の哲学に対して、後年批判されたものは何だったのかという関心からアプローチするため、『論考』3.23の所見を中心に扱いたい。ラフな言い方であるが、本稿では、冒頭で述べた性格を持つ対象が「存在する」はずだ、という確信と、命題の意義は確定してはならない、という確信はどのように関係しているのか、という問題を考察する、より正確に言えば、そのための準備を行う。具体的には、この問題に関して充実した解釈を提出した、Carruthers, Peter 著、*The Metaphysics of the Tractatus*（以下、*MT*）における関連する部分を（かなり駆け足であるが）撮取・吟味する。

対象と実体

『論考』では、まず 2.01 番台で事態と対象との関係が論じられた後、考察のターゲットが対象に移る。

2.02 対象は単純である。

2.021 対象が世界の実体を形づくる。それゆえ対象は合成されたものではありえない。

2.0211 仮に世界が実体を持たないとしたら、命題が意義を持つか否かは、他の命題が真偽に依存してしまうこととなる。

2.0212 その場合、世界の像を（真であれ偽であれ）立案することは不可能となろう。

以上のように、番号付けに従い順次コメントが追加されてひとまとまりの議論が形成されて

²⁵ Cf. Sullivan 2003.

いる²⁶。MTにおける解釈の特徴は、2.0211が、後に述べる「論理的客観主義」との関連において理解され²⁷、以上の議論が3.23と関係づけられていることであると考えられる。

意義の確定性の要請と論理的客観主義

では、3.23を見てみよう。

3.23 単純記号が可能であるという要請は意義の確定性の要請にほかならない。

「意義の確定性」という句を見て我々が直ちに思いつくのは、4.023にあるような命題の意義の鋭い限定、真理条件の完全な限定である。だが、この点について目配りしつつも Carruthers は、『日記』における次の所見に注意を促す。

（意義の）確定性は次のように要請できるであろう！ すなわち、命題が意義を持つためには、命題の各々の部分の構文論的使用が前以って確定されていなければならない、と。例えば、当の命題からある命題が帰結することに後になって初めて思い至るなどということは不可能である。それどころか例えばある命題からどのような諸命題が帰結するかは、当の命題が意義を持ちうる以前に、完全に確定していなければならないのである！（1915年6月18日付け、強調は原著者、括弧内は引用者による）

この所見の解釈上の難点を論じた後 Carruthers は、その核心を、命題の真理条件は、いちどきに、かつ、それが何ごとかを語るために用いられる以前に予め定められていなければならない、と記述する²⁸。この「予めの確定性の要請 (the requirement of determinacy-in-advance)」は、Carruthers が「論理的客観主義」と呼ぶ見方の一側面にほかならない。この見方は、フレーゲ的思考 (Gedanke) の客観主義とも異なり、シンボル間、ないしはシンボルと実在の間の内的関係は、問題となっている記号の意義が定まるや否や、ある客観的で「こころ」とは独立な仕方では確定されるのであるが、このことはシンボル自身の本性にのみ依存する、というものである²⁹。この見方は、論理的対象の客観主義ではなく（これはまさに『論考』で批判されている）、論理的関係（内的関係）の客観主義と呼びうる。

Carruthers は、この見方自体のエッセンスを取り出すため、MT 執筆当時には論じられていた批判（例えば、我々の実践的能力に訴えることなど）を早い段階³⁰で試みているが、本稿ではアナクロニズムを警戒しつつ、この見方をできるだけ『論考』に近い形で特徴づけることを主眼に論述してみよう。

我々は、例えば定義により、記号の意味を規定したりするわけだが、いったん決定がなされたならば導入された記号の意味に関するあらゆる内的関係性は、いかなる経験的要素とも独

²⁶ この辺りの議論の解釈に関しては、Zalabardo 2012により、多くの解釈が“Empty-Name Argument”という名称で一括されている。（Zalabardo自身は、そうした従来の解釈に対して同論文で新解釈を提出している。）なお、本稿で扱うMTは“Empty-Name Argument”として数え入れられたものの中には登場していない。

²⁷ MT 120.

²⁸ MT 52.

²⁹ MT 31.

³⁰ Carruthers は、この見方について MT 31-43 で『論考』3.342 を皮切りに詳述している。

立にすでに決定されていなければならない³¹。これは通常、必然性の源泉に関する「(限定的)規約主義」と呼ばれる見解に似ているが、「規約主義」であることが過度に強調されてはならない。Carruthers は、このような見方をサポートする議論として、述語論理の大変長い式で、「実際上は確実に、おそらくは原理的にさえ」決定できない場合を考察する³²。このような場合でも我々は、当該の式は必然的に真であるか、そうではないかのいずれかである、そのことはすでに確定的である、と言いたい傾向を持つ。式を必然的真として構成する関係性は、我々の能力の及ばない場合でも存立していると考えたくなるのである。このように、我々に関する事実も含め、いかなる経験的要素にも依存せずに存立する内的関係の客観性こそが論理的客観主義の肝であるといえるであろう。³³

意義の確定性と「対象」

では、懸案の意義の確定性と対象との関係について見ていこう³⁴。Carruthers は、必然的存在としての対象を示す彼の推奨する議論を(『論考』でなされているものとして)次のように提示する。彼はまず、一般性(の概念の把握)を前提しない真正の単称命題がなくてはならない、という前提(前提1)³⁵を掲げ、“Fb”という形の命題をそうした単称命題(要素命題)だとして、議論をスタートする。

仮に **b** が偶然的な存在者であるとする。その場合、**b** が存在しない可能世界 **w** があることになり、そこにおいて **Fb** は真ではない。このとき、その **Fb** は(1)偽であるか、(2)真でも偽でもないか、いずれかであるが、我々が論理的客観主義者であるかぎり、このこと(可能世界 **w** をも顧慮した“Fb”の真理条件と解する)が後になって判明するのを許容することはできない。

(1)と(2)の違いは重要ではないので、ここでは代表して(1)の場合だけ見ていこう。もし **b** の非存在が **Fb** を偽とするのであれば、このことは予め確定されていなければならない。すなわち、この条件のもとで **Fb** が偽となることは、予め何らかの仕方で“Fb”の意義のうちに潜在していたのでなければならないのである。逆にいえば、分析の過程で“Fb”の真理条件が明示されていけば、**b** の存在に関する表現(representation)が析出されてくることに

³¹ この「いかなる経験的要素とも独立に」という点は、ある種の経験的要素を帯びざるを得ない要素命題の分析を末梢的問題として先送りにした上で命題の一般形式の定義を達成する、という『論考』の基本的枠組みの設定にとって動機として働いていると思われる。(「形式と概念」の区別についても同様のことが考えられる。)

³² MT 41. ここで言及した「原理的」という点は、次で言及される「必然的に真」と同様、正確に何が考えられるべきであるかをさらに検討する必要がある。

³³ Cf. 『論考』5.442. なお、Carruthers は、より一般的な把握として、新しい文の意義が、すでに知られている構成要素の意義によって、心とは独立な仕方で決定される、という考えについて言及している。

また彼は、ダメット流の「実在論/反実在論」の論争の文脈における「真理の客観性」の観念が、我々を論理的客観主義にコミットさせるものとして論じている(MT 42-3)。しかしながら、筆者はこの点を『論考』における論理的客観主義に読む込むことには懐疑的である。(だからといって、「中期」以降本格的に展開されるウィトゲンシュタインの数学の哲学がダメット流の「反実在論」と性格を全く異にすると考えているわけではない)

³⁴ MT 117-9.

³⁵ MT 98-100, 119 で、この前提が『論考』の見解であることが 4.411 に訴え論じられている。

なってしまう。そして、このことは前提1に反する³⁶。よって、bは偶然的な存在者であってはならず、必然的に存在するのでなければならない。

以上が Carruthers の提示する議論である。この議論には、彼自身も指摘している前提1をはじめ、外せる前提の可能性について選択の余地があると考えられるが、意義の確定性と対象の必然的存在との連関がともかくも示されている点で有難い。さらなる吟味が必要であるにせよ、少なくともこの連関を考える上で良質の手がかりを得られたと言うことはできるのではあるまいか。

この議論において、命題の意義の確定性と必然的存在者としての対象との連関付けに寄与しているのは、論理的客観主義という措定であると考えてまず間違いない。そして、この措定こそ、後年の規則順守論の直接の攻撃目標となることを Carruthers は論じている³⁷。

確かに「論理的客観主義」という特徴づけは、彼が論じるように、後年批判されることになる『論考』のある側面を浮き彫りにしている。だが、というよりも、それゆえにいつそう、『論考』はどの程度「客観主義」だったのか、という問題は精妙に理解されねばならない問題として立ち現われてくると考えられる。というのも、他方で『論考』には「私の理解する言語」という側面もまた存在する。そして、このことは独我論の文脈に局限されてはならない。5.473以降のいわゆる「論理の自律性」に関する所見では、理解できることが原初的な事柄として扱われていると考えられるのである³⁸。

以上、本稿では、MTで論じられた、対象と意義の確定性に関するいくつかの論点を考察した。

略記と参考文献

- Wittgenstein, L. 1922. *Tractatus Logico-Philosophicus*. Ogden, C. K. (trans.), Routledge. (奥雅博訳. 1975. 『論理哲学論考』. 大修館. / 野矢茂樹訳. 2003. 『論理哲学論考』. 岩波文庫) …【TLP, 『論考』】
- 1984. *Notebooks 1914-1916*, The University of Chicago Press. (奥雅博訳. 「ノートブック 1914-1916」. 上掲『論理哲学論考』(大修館) 所収.) …【NB, 『日記』】
- Carruthers, Peter. 1990. *The Metaphysics of the Tractatus*. Cambridge University Press. …【MT】
- Griffin, James. 1964. *Wittgenstein's Logical Atomism*. Oxford University Press.
- Ishiguro, Hidé. 1990. “Can the World Impose Logical Structure on Language?” in Haller R. and Brandl J. (eds), *Wittgenstein — Eine Neubewertung / Wittgenstein — Towards a Re-Evaluation: Akten des 14. Internationalen Wittgenstein-Symposiums Feier des 100. Geburtstages 13. bis 20. August 1989 Kirchberg am Wechsel (Oesterreich) / Proceedings of the 14th International Wittgenstein-Symposium Centenary Celebration 13th to 20th August 1989 Kirchberg am Wechsel (Austria)*. J.F. Bergmann-Verlag.
- Sullivan, Peter. 2003. “Simplicity and Analysis in Early Wittgenstein”. *European Journal of Philosophy* 11:1, 72-88.
- Zalabardo, José. 2012. “Reference, Simplicity, and Necessary Existence in the *Tractatus*”. in Zalabardo, J. (ed.) *Wittgenstein's Early Philosophy*. Oxford University Press, 119-150.

³⁶ bの存在に関する表現として、Carruthersは“ $\exists x(x = b)$ ”という表記を用いている。これは確かに、 $\exists x \phi x$ というかたちの一般命題といえるが、『論考』では等号はあくまでも補助記号である。議論のこの最後のステップの評価は（特に『論考』の枠組みにあっては）慎重になされねばならない。

³⁷ MT Chap. 15. なお、本稿では、3.24について扱うことができなかったが、Carruthersも推奨する研究、Griffin 1964, 61-5が参照に値する。

³⁸ Cf. Ishiguro 1990, 23-4.